

小説「新・人間革命」に学ぶ

世界をつなぐ  
御書 1960  
10.2~

4 シンガポール — 師弟に生きる



・小説『新・人間革命』第30巻（下）「誓願」

# シンガポール

2000年11月

2000年11月、山本伸一はシンガポールを訪問。出席した会議で、国名の「シンガポール」が「獅子<sup>し</sup>の都<sup>し</sup>」という意味であることに触れ、仏法は仏を「師子」、仏の説法を「師子吼」と呼ぶことを参加者に話します。

山本  
伸一

## シンガポール（2000年11月）

（日蓮）大聖人は、「師子」には「師弟」の  
意義があると説かれている。仏という師匠と  
共に生き抜くならば、弟子すなわち衆生しゅじょうもま  
た、師匠と同じ偉大な境涯きょうがいになれるのを教え  
たのが法華経なんです。

伸一は次の御文を引ききます。

おの おの し し おう ところ とり いだ  
各各師子王の心を取り出して・  
いかに人<sup>ひと</sup>をどすともを<sup>こと</sup>づる事なかれ  
(御書 1190 ページ)

伸一は、「師子王の心」とは、「勇気」  
であると訴えました。



勇気は私たちのどんな力を  
呼び覚ますと思いますか？

山本  
伸一

## シンガポール（2000年11月）

勇氣は、幸福という無<sup>む</sup>尽<sup>じん</sup>蔵<sup>ぞう</sup>の宝の扉を開く  
カギです。しかし、多くの人が、それを封印し、  
臆<sup>おく</sup>病<sup>びょう</sup>、弱<sup>じやく</sup>氣、迷<sup>なみ</sup>い<sup>ま</sup>の波<sup>なみ</sup>間<sup>ま</sup>を漂<sup>ひょう</sup>流<sup>りゅう</sup>している。ど  
うか皆さんは、勇氣を取り出し、胸中の臆<sup>おく</sup>病<sup>びょう</sup>  
を打ち破ってください。



伸一は、旅先で<sup>いちじる</sup>著しく体調を<sup>くず</sup>崩すことや、学会への誤解から、政治警察の監視の中で同志の激励を続けることもありました。しかし、一歩も退かず、世界54カ国・地域を訪問。SGIは現在、192カ国・地域へと発展しました。

山本伸一にとって師・戸田城聖は  
どんな存在でしょうか。戸田先生  
の存在は、伸一にどのような思い  
や力を与えているのでしょうか？

伸一は折々の場面で次のように語っています。

「戸田先生ならどうされるだろう。どんな戦いをなされるだろう」と、常に考えている。また、先生がご覧になって、お喜びいただける自分であるかと、常に問い続けている。だから力が出せた。勇気を出すことができた」

第8巻「清流」219ページ

“師匠のように偉大な人生を生きる、と決めることで、師の歩んだ高みへ自分を押し上げ、以前からは考えられないような結果を残せたり、小さな自分の殻を破ったりすることが出来ます。

## 池田先生

私が27歳の時（の日記）である。「（戸田）先生と、丸半日ご一緒。（中略）先生の曰く『大ちゃん、人生は悩まねばならぬ。悩んではじめて、信心もわかる、偉大な人になるのだ』と」

偉大な師匠に青春のすべてを捧げ、悩んで悩んで悩み抜いたからこそ、今の私がある。